

中庸云。言不辱。言不微。先之。臨都
堆備藩士。岡田有恒。乃吾門知年。雖
好學之志篤。其職計吏。日弗暇給。勤勞
繁劇。歷仕四世。三十年一日也。而不能專
力於斯。可惜哉。加旃。余中間越在草莽。
愈益遠隔。其際踴々涼々。欲絕而不絕。
然一日而其心未嘗不在乎余也。惟吾乃
不見而然。外人胡獲預知焉。心交千里。

彼此相照也。而厥始。俸為職微。而為委
心乎其事。子為子其孫。已莫汚沐澤
之累。又靡納苞苴之謗。故能推擇超遷。
歷年遂班校尉之列。今見為會計長。無
纖介之嫌。積善餘慶。冀清白吏貽厥
孫謀。可企及哉。至庚午歲。其嫡字文
者。克繼父志。復從余游。夫名者實之
賓也。向以其父為計吏。相尋。而文性

化以長。辭請居散後。將從子正。斯文。
文之為文。與其實相名。亦乞乎可見矣。
篤學研精。人十能之。己千之。思之弗乃
弗措也。其好孫之心。正白。一曰從容。以
余曰。非敢求名也。文也。固陋。所庶幾古
先士。無他焉。籍令俚諺鄙辭。苟有以
可便初學者。收蓄臆見表志。先生願
賜餘損。有餘補不足。正謬董紕。試賜

批評。則是文之幸也。余取而視之。愕然改
容。喟然歎曰。為之哉。子之洪福也。向
子家大人從學之日。殆已而立。而鑽研積日。
致弗倦。已雖升堂。未及入室也。以公復
靡。臨不能卒業。宿志弗果。半塗而廢。而
子且不然。既初冠。業已至研究我理。且
志守不力。倍加家大人。且述既身已智
重。身學之意。以不勤為。不友。速上諸
梓。公之四方。身青益冰。身孰。不之
哉。余賞其濟。身之志。不己。因以所歷
親書。遂之云。

天兒。身之孫。大中。五內。相繼。子之
裔。平安。城。西。查。守。名。身。瀑。詩。之
那。人。孫。我。敬。季。泣。就。東。武。城。為。屏
谿。白。金。色。信。唐。為。併。書。



萬物紀原故事大全上



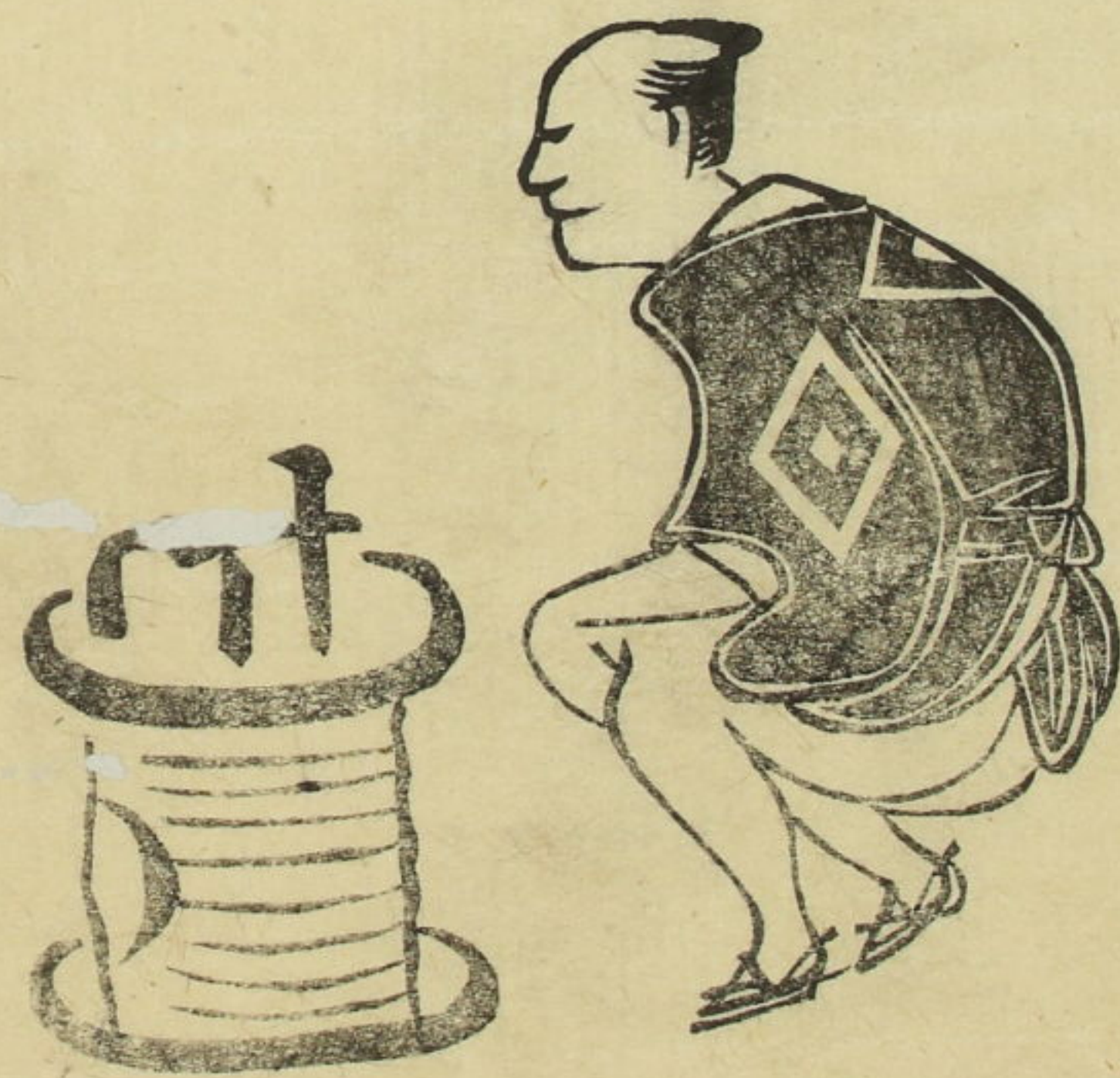
東都

岡田有信輯著

傾城の説

或書云。傾城傾國の美人の稱あり。今の人
誤て遊女をさして。傾城と云ふにいたる

傾城といふことのおとりの。もと漢の李延年吾が妹の李夫
人の美人たる事を武帝の前まで賞嘆せし詞也。その
言葉は一笑傾人。再笑傾人。城とあり。又詩經に哲
婦傾城とあり。とらうの正より。今遊女をさして。うくり
やん心あるものへのぞくる。



田分の説

俗書云。俗又氣のたゞぬものをばたを
けといふ。そのたりの。むりーある村。田
十石不どもてる。土民あり。男子二人あり。老てのた
のあことて。おさなをより。愛する。と甚し。あるところ。次男
と。他の家へ。養ふ。に。やると。さき。ひ。已死。する。とき。遺
言に。うの田十石を。子供二人りに。分け。あたへ。且。次男を
我後。とり。ふとも。他の家へ。行。な。り。せ。唯。兄弟。五石。の。
田。と。守。り。月。日。を。送。る。を。よ。し。遺。言。し。て。死。な。り。及。り。その
後。二人りの。男子。の。父。の。遺。言。を。あ。た。が。ひ。五石。の。田。を。守。り。
月。日。を。送。り。行。な。ど。に。妻。を。む。り。な。ど。せ。し。に。うの。月。日。が。あ。り。
五石。の。田。に。て。中。く。く。り。難。く。遂。に。二。軒。と。り。と。む。に。つ。ふ。し。

あとりやよつて人。是を。た。を。け。と。り。傳。へ。し。あり。

人を拂かにせしむる説

或書云。道を行くよ
人。に。拂。か。に。せ。し。む。と

い。の。昔。帝。と。り。諸。國。へ。御。使。を。く。た。さ。る。と。き。の。役。馬。を。
譯。と。り。し。う。此。を。を。ひ。く。も。の。を。い。く。と。り。し。う。道。路。の。男。女。を。
な。り。し。り。の。さ。よ。け。て。と。を。せ。是。古。實。なり。今。よ。の。古。
實。の。ら。ま。て。を。い。く。と。い。か。て。人。を。よ。け。さ。せ。る。あり。亦。或。説。し
ハ。公。用。の。使。よ。る。を。追。立。て。も。く。を。隼。人。と。い。か。この。公。用。の。使
重。さ。ゆ。い。道。よ。て。ひ。と。の。よ。け。る。あり。そ。を。世。俗。人。と。い。ひ。の。な
り。な。ど。よ。て。公。用。の。使。の。隼。人。と。い。か。て。人。を。よ。け。さ。せ。し。よ
ア。今。に。よ。り。の。と。い。ふ。よ。し。

馬鹿の説

史記云。唐士荼の世に。趙高といふ人あり。已う意にほらして。既既に亂らんをなさんとす。

おそくく。羣臣ぐんしんのさりさうんとをわゆひ。まうそのあはし
見ん鳥たみ。鹿かを指ささしるなりといふ。左右さうの羣臣ぐんしん或あるは
黙もく。或あるは阿あ。言ことふなりと云いゆあり。さうなりといふゆのにと
賞しょうをあたへ。鹿かといふ者ものは罪つみに行なふ。是こゝより後のちよりいふこと
をさし。世俗せきじゆのたうぬゆのを。鹿かといひ。あうせし也。

五位鷺の説

或書云。延喜帝えんぎてい。醍醐たいご天皇てんかう神泉苑しんせんえんに
御幸ごきやうのとき。他いのけしけしは鷺ささぎ居いるを。
六位りくゐとるて。えてまいと作ある。藏人ざうじんの昔むかしとやうけ。や
かて。えて奉ほうり。宣旨せんしは後のちひ。ありたるを神かみ沙さあといふ。

今いまよりして鷺ささぎの中の王わうたるを。として五位ごゐよりなさんと。
御札ごさしをささぐり。めををして。くひよつけめ。是こゝよりして。
五位ごゐ鷺ささぎと名なはけたり。是こゝは鷺ささぎの御料ごりやうゆめをたう王位わうゐの
かとをあらう。えさんたえありと。評ひやうは見みたり。さうとどの説せつ
正史せいし實録じつろくにたり。攝しやくな。信用しんようするにあり。志しをさうく。俗ぞく
説せつを評ひやうさ。鷺ささぎを五位ごゐよりな。と。左傳さでん云いふ。衛ゑいの懿い公こう。
を車くるまに載のせ。史記しき漢書かんしゆ云いふ。始皇しはうが。泰山たいしんの松しょうを封ほうし。枕譚しんたん曰いふ。始はじめ
封ほうして。五太ごたい丈ちやうとさ。五夫ごふの。秦しんの官くわんの名な。九くの辭じあり。たる類るいにて。こゝを稱しょうをさ。とあり。位ゐは功こう
臣しんにこそ。施せさる。さきよ。勅しやくよりして。退たいさ。家けをたうと。禽いん鳥ちやうを
五位ごゐより。み。り。功こうある臣しんを。い。な。そ。り。な。う。あ。か。へ。王位わうゐ
の祀まつりを。ほ。ら。り。め。り。う。い。道みちを。守まもり。て。民たみを。え。く。む。の。獻けん。え。ま。し。

はさび可あらしん。

米の説

俗書云。米一粒たも。そまつよらつてさび年八十八
まで富士浅間のその身につまよひよりをま
よりあふよーその意ハ米といふ字の上のハてん是ハちり中
の十の字是十あり。あといよて都合八十八年あり。

石臼藝云の説

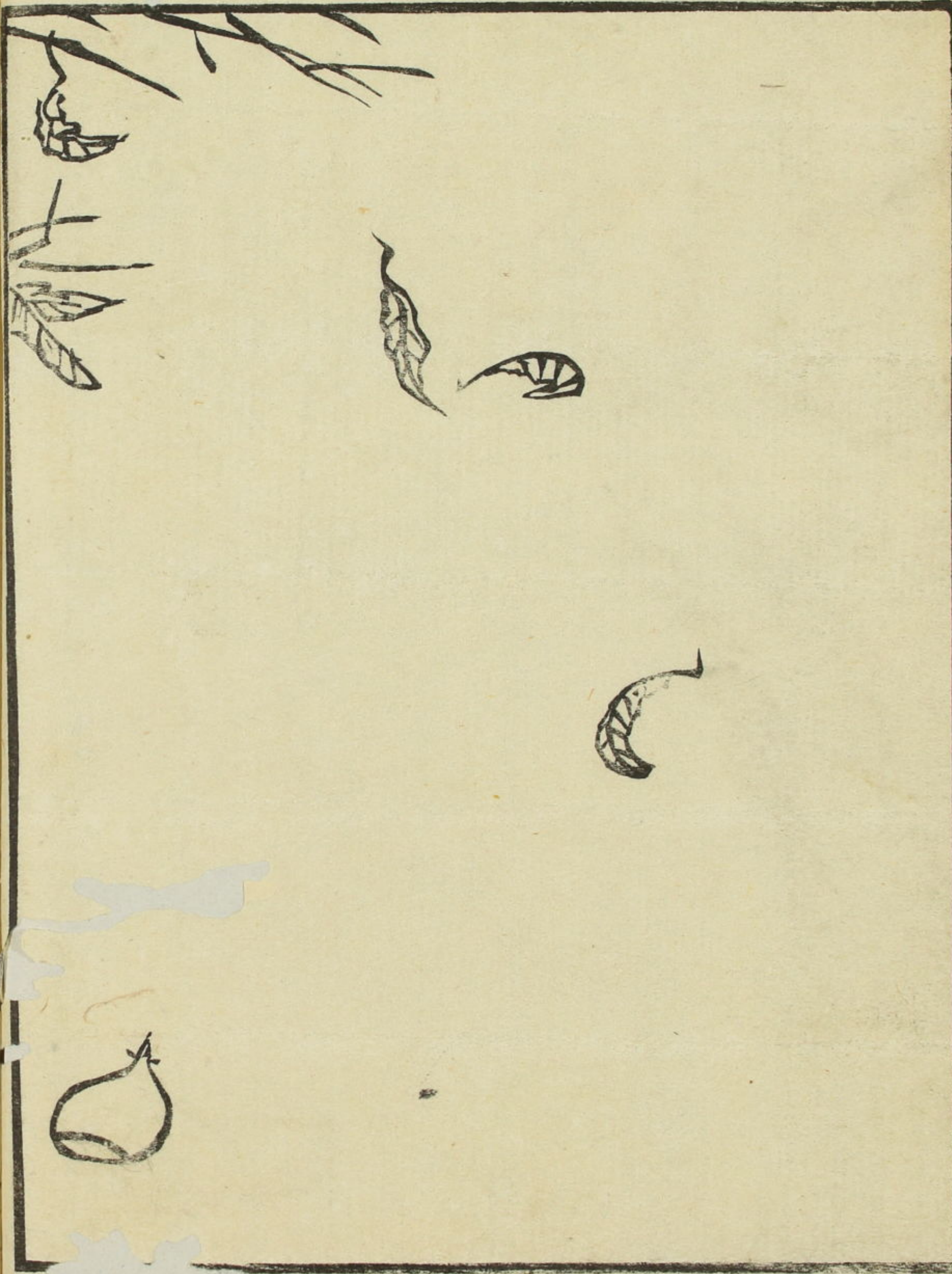
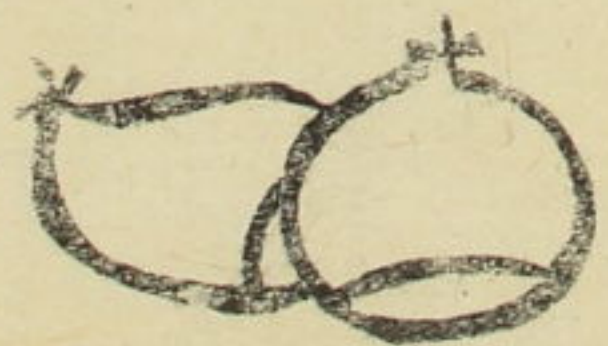
ある。短冊二枚を信玄よこせたり。氏真ハ甥よて。氏政ハ婿あは
信玄よこせたり。よろこまんとおゆひーにこめて。國持武勇
あふて。さやーやあるハ。猫の爪のともを。色のうるそーま
ごとくあり。武篇さへあは。無能ありとも。至てさややあり

といふる。武勇ハ武士の能あり。家の能ハ由あふぬ。歌
道のまくとたるハ。のとり多も。石臼ハはくの用にたてとあ。
坐浦よのあけ。茶臼ハ茶をひく一能よて坐上よ由並くあり。
兩人の歌道ハ跡ハ石臼藝ありと批判せんとあり。是
よりいづくか。藝をそへたるものをかくり傳へ也。

丹波の爺栗栗の説

と。その中よて大なるを稱して。出落栗といふ。又或説よハ。丹
波の國の土俗。あやほりて。昔父よ栗とあまつたり。よつこ
父の肌よ瘡つく。是より父栗栗といふなり。是し。非
あり。出落栗を用ゆる。

九月所々の山林より。栗を
出。丹波の大栗を。名産と



君子の説

俗書云。生と出るより。君子といはるる
しこと。先君子よあるよりいらくの苦
勞をせし上りて。君子といはるるあり故に君子を。さうさま
讀ハ。あんとくともあるあり。いりどあんとくの功を積で。後よ
き君子とい。成るしと。甚非あり。春臺がいか。君子とい士大
夫以上。學んで後仕ゆるの人をささごと。しを信ををし。

餅をおちんとし説

頭上にいりて。禁垣の内に賣。内家のメ子。褐塵を呼て
是を買。その後婦人。直に餅をいりて。褐塵といふ又或説い
りちんむり。早魁のとき。土民等能因法師をたのめて。歌

をよほせりる。またち雨あせり。土俗よろとび餅をつきて。
由てあし。能因是の歌賃うといり。餅をうちん
とよい来といり。前の説用を。

百姓の説

孝經の疏云。百姓の天下の人をいふと。こを族
姓あり。言の百。その多を擧とあり。世俗
農民と百姓といふ。後かを。さしと民のうちよ。さよくの
姓氏まじりあり。あんとくとも土民のこよかきり。百姓といり
かたし。多親王。姓氏録を輯らして。猶いま。二十二百
八十二氏あり。がせらなり。人かとりて。己が姓氏を取し。なひ
源平藤橘四姓あり。ていあきやうよえて。我こそその人のまん也
と偽り系圖など。妄作し。さうくめきむくもの多し。姓も

氏由元ひとつあり。今源平藤橘の四姓のえをたがぬる。弘仁五年五月八日嵯峨天皇の皇子信初。源の姓を賜ふしあり。桓武天皇一品或部卿葛原親王の嫡子。大學頭從四位下。孫王天長二年閏七月始て平朝臣の姓を賜り藤原姓。天智天皇八年十月内大臣鎌足連始て藤原の姓を賜りよし。橘へ天平八年十二月甲午葛城王は。是て橘の姓を賜る如く。此外數多。四姓のとく。姓のあることをある。今姓氏録に也。ぼりて。こゝに畧せ。

父母の説

父母を。父母といふ。日本紀神代卷に見ゆたり。是父ハ物との數をおさめる也。かをといふ。母といふを。おしめる也。いづはといふ説あり。猶考をる。

十ッ徳の説

俗書云。十ッ徳ハ。近世多くハ。医師又ハ。剃髮の人。是を著さる。十ッ徳といふ。こけのその十ッ徳の形。材織のこく。らちのこく。といふよ。つてごらくと。めをせて。十ッ徳といひあり。

寺の額に山号ある説

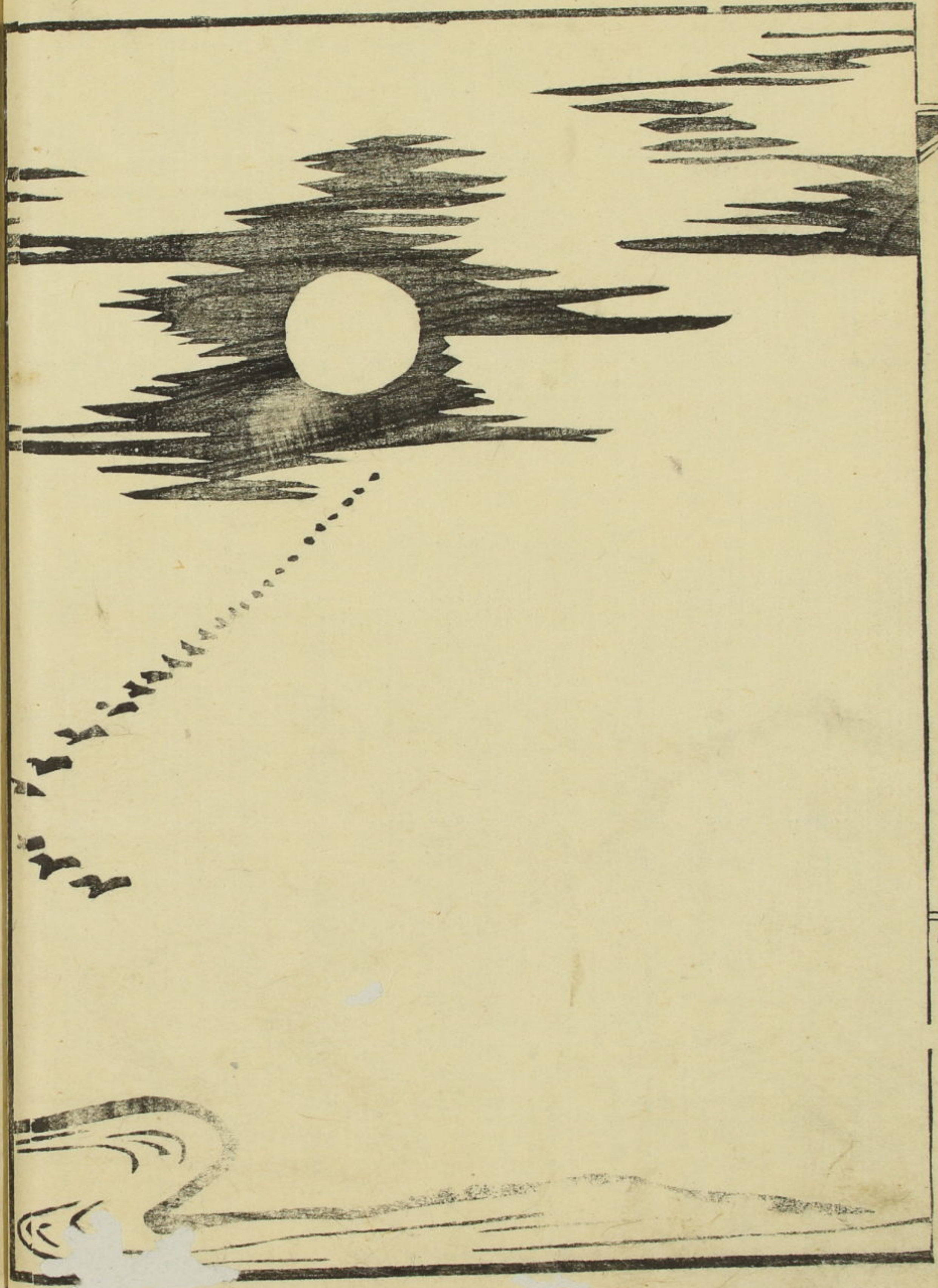
或書云。山中あきたけあり。地ハ寺あり。と。と。門或ハ堂の額。萬年山光明山など。いづくの山号を。つけるあり。其心日本山跡の國故。足合。平地の寺といふ。山号を。つけると。やと。んたり。又或ハ佛は。はる。その山奥などの。ん。ど。ち。る。如。く。住。世。の。人。と。ま。す。一。筋。ハ。仏。は。く。み。ま。る。る。由。の。故。平。地。ハ。住。む。と。い。ふ。山。奥。な。ど。ハ。心。

とき。猿と以て是又配を故に後世とを稱して猿楽といふ。獅と以て供奉の類とするの誤ありとあり。まづこの申を猿とくくこの類よりおとるるを。昔の申示おろしきことを。源平盛衰記云。猿示とトのわらひしき事をいひきけて。人を笑ひしけり。古事談より。白河院の礼前より。我大相國中さとして云。猿示と酒をぬく。今ハハと云ふハハと云院笑ハハと云。又盃とさくはらうとす。和事始に揚て辨せり。又申示ハハとす。あつや。宇治拾遺云。堀河院の御時内侍所の御神樂の夜職事家綱と先してとよみあつし。申示はく。まづと。おろせり。又源氏物語乙女の巻に

もさるる。かほしとあり。是猿樂のことあり。此兩卷をばにのせめること。申示ハハとす。亦申示を中華とてハハ散樂の字に作る。六朝樂志の部より。考ふる。散ハハアキト訓。雅樂と異なる。應用のなることものあり。

鞠の始の説

訓蒙圖彙大成云。鞠の始ハ唐土女媧氏の代。逆臣蚩尤といふもの謀叛を企軍に及。女媧氏ハ女帝なり。聖徳あり。依て力民のびき従ひ。後ハ蚩尤を討亡し。其頭をを祢たり。諸人蚩尤を悪きて。頭を蹴たり。是則鞠の始と云。鞠のなる。松栢柳檉の四本をうつるあり。飛身井家疑波家



鞠の御流あり。上加茂松下一流ありと云たり。

殿猿とかく説

漢事始。東晋の大將軍趙固が
宗如の暴死を將軍是と

悲しむと甚し。郭璞是を夢て。とを生さんとて救
十人として。竿をもち。東に行事三十里して。歎を
あたり。其形猿のごとく。持歸てるの前。並彼歎の鼻を以
るを吸き。起て躍るの如く。將軍其怪を。今
猴を殿とかく。是より起ると。獨吳志に出たり。猶稗海
又云。晋の趙固の病を郭璞是を見。曰。猴とてかくと
相。と云。病愈ると云。とありて。璞が言葉。隋
采。てこの病愈ると云。とあり。

茶おきの説

俗書云。人を由てある。茶をいこと
後菓子を出し。是を茶おけといふ

此意先客其菓子を喰ふ。よに由ち。茶を。あ。よ。お
く。故。菓子。茶。おけ。と。あり。又。或。説。よ。い
前。の。如。く。に。客。茶。を。い。と。き。その。茶。を。よ。く。の。ま。せん。あ。は。し
菓子。を出。茶。の。う。け。の。よ。き。や。ら。た。を。菓子。茶。う。け。と
い。よ。し。猶。考。あり。

田作の説

能諧歳時記云。乾鯉臭あり。との臭をもつて。
田の菌とざる故。田作とい名つくあり。

鯉の名の説

天文六年の夏。小糸氏細。となと。小
田原。よ。つ。ぬ。鯉。お。と。つ。く。舟。に。入。る。その

とさ氏うじ網勝負あみまがひよかりねと稱なづさ。同七月十五日上うへ秋朝定あきあささだと戦たたか大
ひよ利りありそとよ。との方せん戦場まがひの門出かどで。專せん鯉こひをつらひし
とありん。

神の文字の説

かことりふと。むうーと。いふことあり。
是鏡これといふそのつれ語ことばよてかことりふ
あり。鏡かみといふもの。よく万物ばんぶつを。あきらかようつとせゆつれ
語ことよてかことりふあり。

白鼠の福の神の使といふ説

たり。又抱朴子あつぱくし云。鹿しかの壽百歳じゆひゃくさいよろし。則色白すなはち。よく人ひとよ。
つく下しもふ名なて仲なつといふ。能よ一年いちねんの中の吉凶きうきん及千里せんりの外ほかの事ことと
あるとあり。皆みな是等これらのあや。説ことばよて神かみの使つかひといふことありし

本州ほんしゅう云。黄金おうごんの精化せいけ
志こころて白しろとあると

太刀の説

或人あるひと曰。日本にっぽん昔むかしハ太刀たちといふあり。之これ後世ごの事こと
あり。既すでに日本にっぽん紀きも太刀たちといふことあり。こま
劍けんあり。素戔すそ鳴尊なるみのもちあり。劍けんをバ八握やぶ劍けんといふことあり。
の如ごときつるさあり。然しかるところ。本朝ほんてハ金かねの生来なま。至いたてうとくよき
ま。両りやうをを用もちひきして。劍けんのまん中なかつよりたちよたり。よつて
斤しんその劍けんを太刀たちといふあり。是これたちよるといふあり。太刀たちの
稱号しょうごう出いしあり。

日本國の説

天地てんち開闢かいびやくして地ちのこな山やまとあり。人の代よと
ありて。山やまをさりひらき平地へいちとありて
住すり。よつて日本にっぽんを山跡やまあととよむといふ。又或説あることばよハ天地てんちひらけ

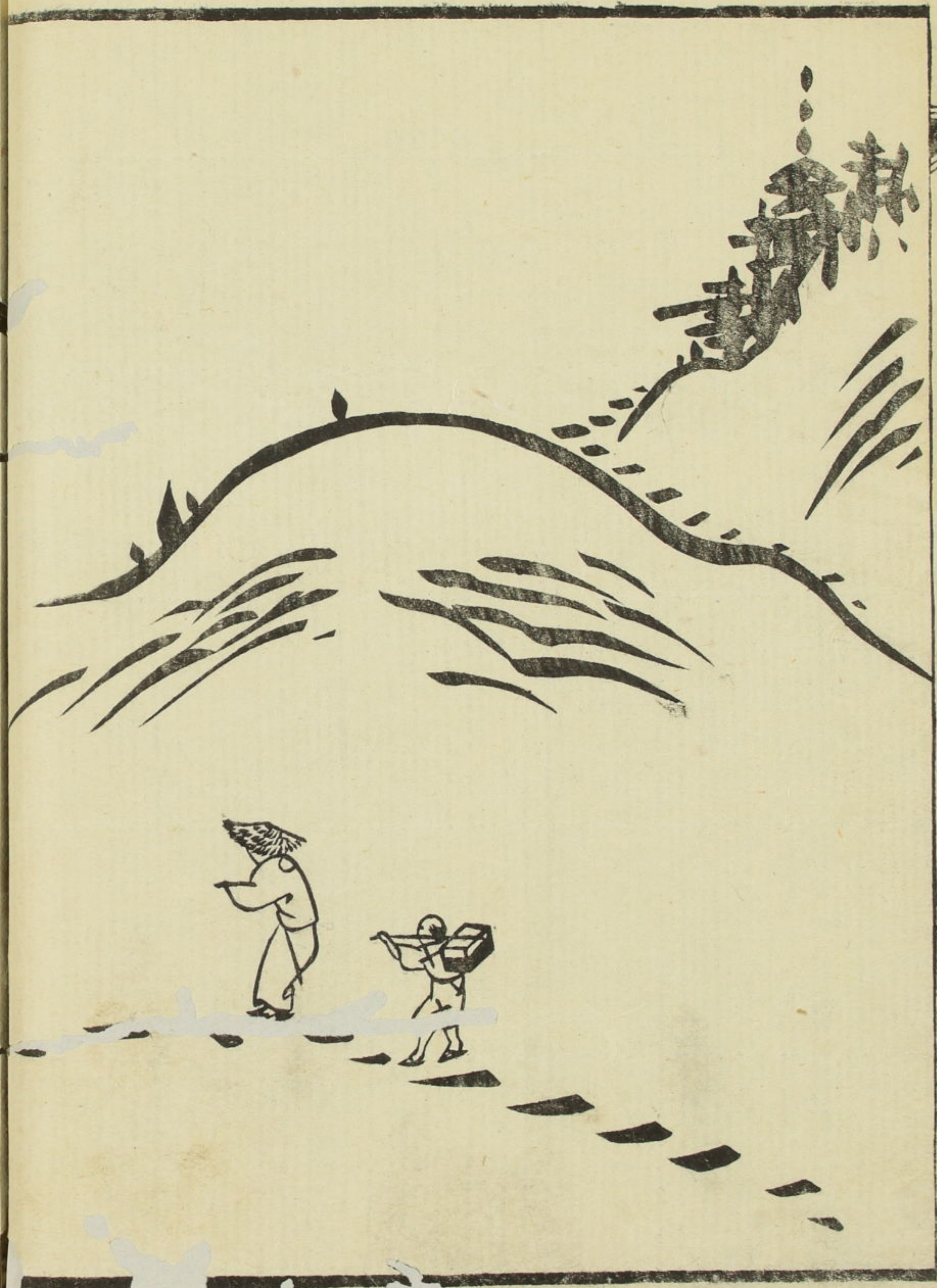
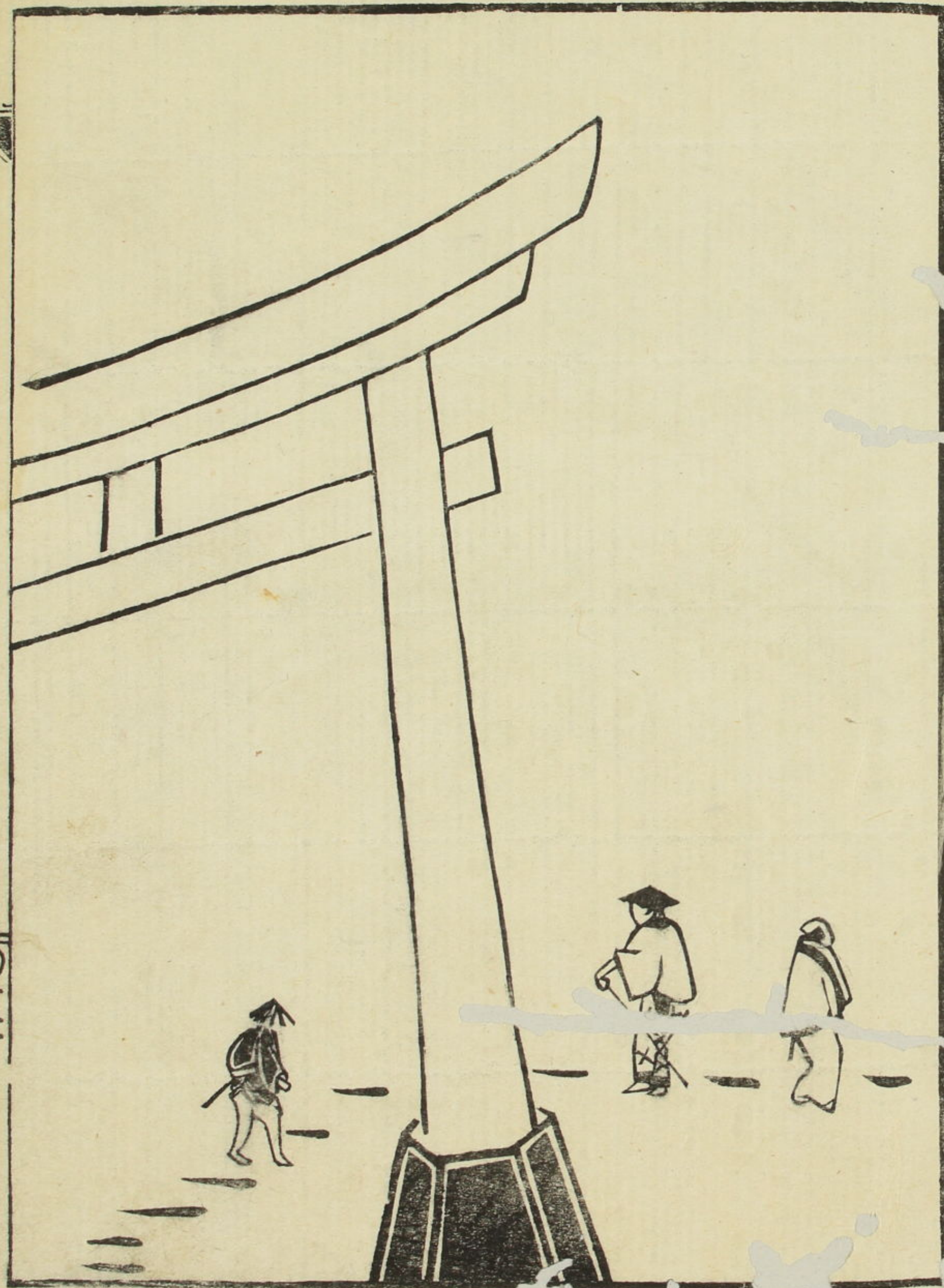
てひとつの山あり此山は人まづ住りごとと山いまで水うそ
かりして人か免は足跡つゝあり此足跡をとて多く人の集る
よつて山はあつとつく故山跡ともいふよゝ又或説は前のこと
く山は人住後ハ次第は地もひろくあるまゝ王城ともいふはさ
ゆのをたてたり。是前の山を跡はちりてたて故山跡ともい
かよゝ日本とかきてやまとと讀あり。

堀に水鳥をかく説

或書云堀は水鳥をかくの軍
用の為あるよゝ口之敵いそりよ
夜討なとよ。おゝよせ来るといふと番の兵口之とさるゝ
あつとさるとさるゝの城あやうし。今あつとそして癪ひるゝ
いふとさるとさるゝ堀のあつとさるゝ。該てまひあがるゝある也。その

羽音はあんなを癪むゝのをさまさるゝんやさまゝて夜討のと
とあつと水鳥も一ツの軍用あるゝゝ既昔平家の軍勢の
内もても大將軍ハ左少將帷盛なと源氏を襲と欲し富士
河は陣せしと富士の伝のあつとむゝり立。その羽音ハ駿
その場をにけしよゝがれと鳥の羽音もさるゝのあり。なん
を癪ひるゝんひのさあつとんや。

昔水鳥の羽音ハ平家の駿しとハ東鑑云武衛頼朝公駿河國
賀嶋に到し先あふ。又左少將帷盛薩摩守忠度參河守知
度等富士河の西岸は陣を而半更子及んで武田太郎信義
兵畧と廻し一件の陣の後を襲れ。富士伝は集るところの
水鳥等群立。その羽音偏軍勢の粧とあつとよ依て平



氏等驚駭と見たり。

鳥居の説

日本紀云天照大神天の岩戸よりくまひ
しうべ日本國とあり。よつと諸の神々
あゝこめひ遂にツのそかりとを由りけ。雞と多く岩戸の
前よりあつて鳴りしめあひしとあり。是雞のよの明るごとく
る故諸神口よいていとぬまき雞となりせて岩戸をそ
く出ぬひ。この世をあらうくさせぬと。しよこのため集
めしちり。是よよつと岩戸を大神出ぬしとあり今
その鳥のしよあたりへたてるを鳥居といふ。

武士とどのふと訓まる説

王代 覽云神
天皇元年宇摩

志麻治命と道臣命と兩人武功勝とたるよよりて軍兵を
召具し内裏を警固と道臣命の司とる軍兵と。未圖部
の宇摩志麻治命の司とるところを物部といふ。今よ至
まで武士とものふとあり是より始りしんたり
武士訓云宇摩志麻治命武功勝とたるよよつと軍士と
て内裏と守護せしむるとを令せらる。其司とるところを物
部といふ。是等のとよりして武士とものふと訓まることし
まとりとこたり。是同意あり。

雪踏の説

和事始云昔ハ尻切といふものを用也。天平年
中。泉列境の邑の茶人干利休といふもの。
作意とかり雪の比茶會のとき鹵地入のためよ。草履のう

ら半の皮を付させ用ひけるあり。雪をかひ義を雪踏と
名付たるよ

先皇絲のは志めの説

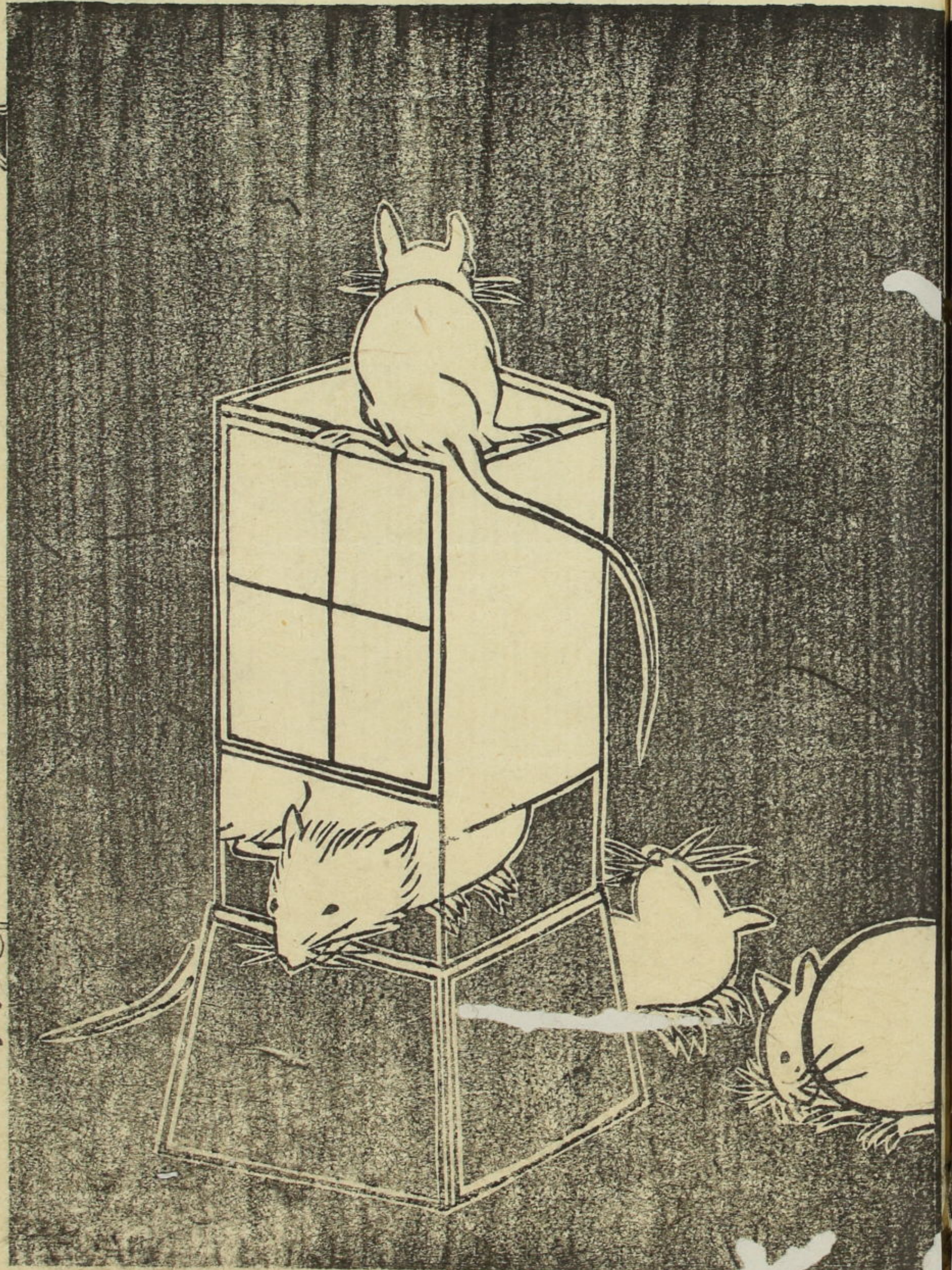
馬とをのこ一益ぬ女父をおひてゐる戯るの。汝よく吾
父と逢へ来らば吾はさよ汝が妻とあるん。云。則轡
を絶て去父を乗て帰る。後よそのる彼女を。則怒る父
とをわや一と女よたらぬと。ぼぶさよその。とを答ふ。
父大に怒て。を殺し其皮をさうと。女よ皮をさうせ
よ至り。忍よ女を巻て行ぬ。後よ大樹の枝よ。皮の女
巻たるを。うと。まてよ死して蠶とある。因てその樹と

名付て桑と云桑の喪ありとあり。是は。めあふん
いとわや。日本よてりひこのは。神武天皇より二十一
代目。雄略天皇の御宇。國の蠶を集めめひ。とあり。
是始。ちるる。唐士よてり。唐虞の昔より飼立たる虫よ
て上の説の如きあるよあり。

事始事納の説

能諧歳時記云。事始十二月八日事
納二月八日あり。今俗此日竹竿の

先よ。目従を付家々の斬し出せ。この意。昔源義家朝臣眞
別征伐の日。先大屋の大夫が家よ陣き。この時東國半をいま
心服せと。大夫同志の者に約さうく。八幡殿よ志ありん
者ハ門よ識と出。證とせよといふ。さよ。各門よ鞞を



書も毎の
いそひつ
多の
海心
来
喜

領巾をぬきてらまをま祓く。是よりして此山をひと魔の嶺と名づく則今有ひとりの山あり。さて依用姫夫をあらわりのみくしてひとりの嶺に石とあり。今按に依提比古朝命を蒙り藩國へ使へり行きてとへ。萬葉集よとあるて既歌あり。

とてろ人松浦佐用姫つまたひいりむとありし。あくふ山の名とひと魔山のこと。山の上憶良が詠せり。石はなりしとハ非あらん。あせあらぬ云夫を唐使行を去たひ依用姫石よあらつたるよ。いんたり。今あせあらぬよあると。いんども。日本紀をばしめと。世この撰集。或ハ實録等。石よあらつた。とていんづ。猶考ふら。

上戸下戸の説

俗書よ云。酒をよく呑むのをさして上戸と。少く呑むのを下戸と

いふ。其由来を今たがぬる。唐土。秦の始皇咸陽宮と史記。及を作至て言さ。とをそのむ故に咸陽宮の寒と其し。今暑中といふとも富士へ登りて寒とく。然るに咸陽宮の寒と平地とく。より依て。その門を守るとのよ。は縁のこの初がた。故に酒をよく呑む者。とて。上の門は。おいて戸の明たてをさせるあり。とて。さうり。次の門は。この上。と。よ。あ。ぬ。故。少く。呑む。の。よ。て。由。寒。を。考。の。け。る。あり。と。つて。次の番人を下戸といふ。上を。上戸といふ。あり。と。せ。し。あり。いま。上戸下戸のり。是より起。し。あり。ん。

月よ色々のくたをのを備める説

野中備水云
本朝よそい。

十五夜十三夜よハ先いろくのくたをのをとつての月よさくく
是本朝をくりの事ありとうや。其意ハ昔天照大神の御筈
月夜見尊命をうけて葦原中 國にいたり。五穀をつくる
保食神 此神いろくのくたをの作ることをく人にあしめしむに。かひのみ保食神
則百ルよ悉いろくのくたをのせ。月夜見尊へ依りとうや。
よつて今よ月よさくとり。十五夜十三夜にいろくのくたをの
を依ふるをくたをのとありいとあやし。

斤假名のろは假名の始説

斤假名の吉備大臣の
作して。アイウエラの五

音を并るをくりいろは假名四十八文字ハ僧の空海の作ある
し。簾中抄よ見たり。

穴賢の説

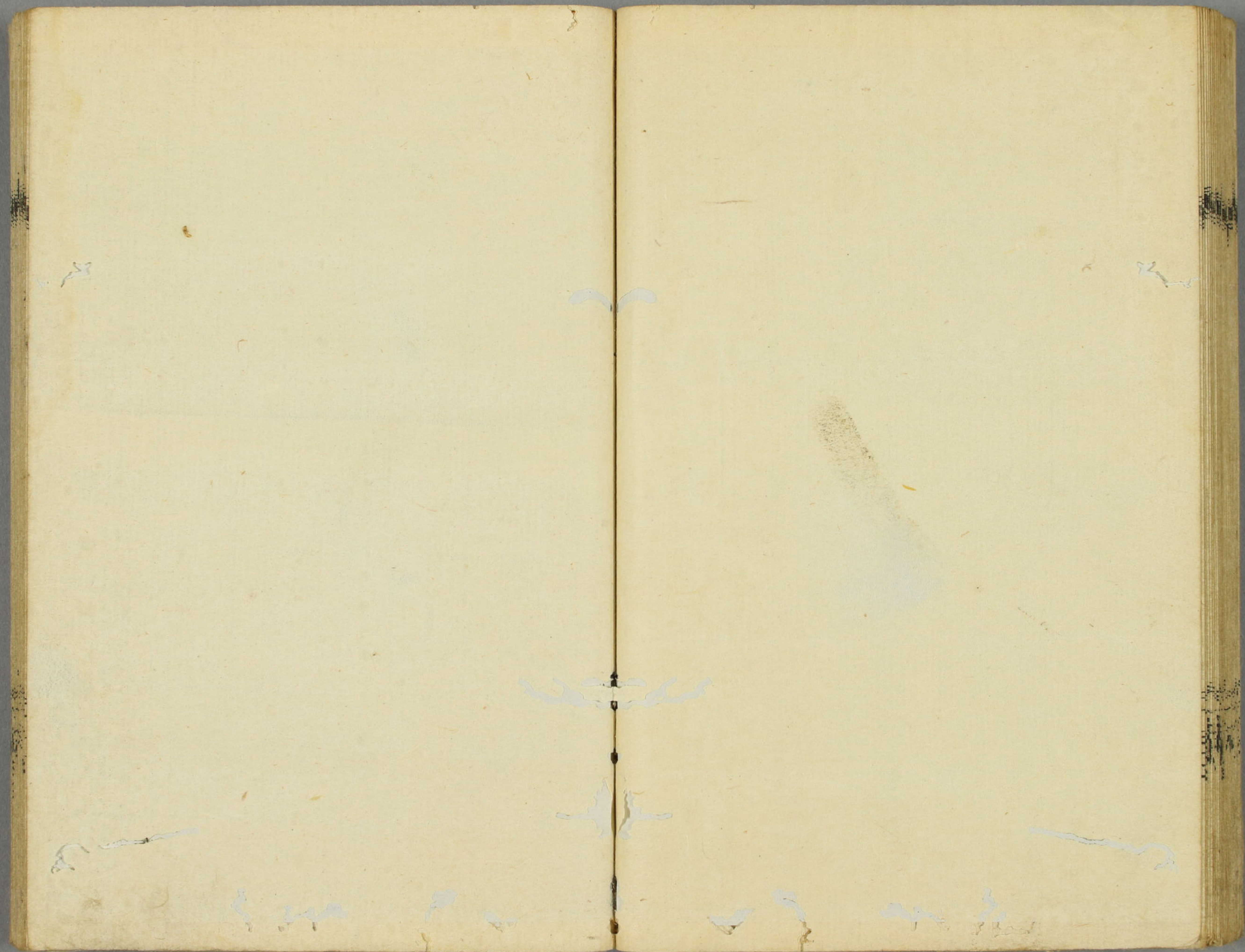
俗書よ云穴賢と能書札なとにくく今此
説をぬづぬるよ和漢とも昔ハいまご

家といふもなく。さゆのとりかゆのものもなく。昔をたうあり。そ
たりあんごまてと。なゆく家たうして。表のさ糸一ゆ
に。穴を掘てその中へ住るよし。依て書札よ穴賢とくくどの
意のなり。こく。無恙といふ。くろあり。亦無恙といふ。その比
は。ぐとらひ。ありてひとをさく。よつてあまじ
く。つかなさうとをぐぬる意をくさおくるあり。

茶の銘の説

或書云茶橋といふ春のことあり。字治ハ
茶の名所あり。その字治より出茶
の銘のうちよても。初昔後昔といふ茶名あり。此意三月
廿一日。摘茶を。初昔といふ名づくるよし。廿一日の文字一字ト
よそとバ昔といふ文字よあるあり。三月廿一日よつひちやと。
初昔といふ四月廿一日よつとを後昔といふ。つと廿一日の
文字と一字よすとバ昔といふ字よある故。この名起るある
なり。とや。

萬物故事大全 上終



外まらちあるといふとも。や 天皇の山陽道と程ありき。播磨の宍
 より山陰道より。遷幸あらせむるま。徳猶由力をし
 あり又員作の秋坂。待奉ととも天皇と和院の庄へ。つぎ
 ありぬとき。皆々気力を落し。夫より散々ありたり。よつて
 徳一人とせえて此而存と叡聞は達せんとありひそか。院
 の庄へ忍入り。時を伺ひりとも。天皇よまも。せむるま。ひま
 さま。御坐ある御宿の廷は大方。様の木あり。ちり。押削
 て大文字。前的一句の詩をいひつたり。
この詩の心雪會誓取といふ語
の要りて見合考のこととる
 よく朝武士とも。是をんてま。に讀兼あや。ひとくとも。天
 皇とや。其詩の心をさつ。御心の内。よることせめ。か
 といふも。さめ。ね。笑ひせめ。ひぬともん

てうりたの説

俗書云。是の子供等。火などよ
 て。手をやくとあり。その後重て

へゆうこりたといふけら。わり。蒙古人。数万の軍船をひ
 きま。とひ来り。日本を襲をんとせ。そのとき本朝。て。蒙
 古。向。んと。とき。大將。早良親王。を。と。め。と。然る所
 早良親王。の。ある。舎人親王の社。め。か。で。ひ。つ。が
 なく。蒙古を。た。ひ。けん。と。を。禱。り。め。ひ。そ。と。より。蒙古
 向。んと。一。か。を。り。し。由。俄。神風吹。て。蒙古の軍船
 を。と。く。吹。や。ぶ。つ。たり。より。親王。我。を。て。勝。を。ひ。つ。り
 その後。蒙古人。本朝。を。一人。た。由。襲。来。る。と。な。し。と。う。や。今。倍
 言。に。蒙古の國。を。さ。し。め。う。こ。り。た。とい。昔。の。う。圍。り。た。と

云一より今いまの字をのぞき。もうそりたといふこと。

いせいはしひの説

いせいましひといせ此こゝ心こゝろものを諱いひ意いあり。よろて諱いせ々々ひと
いふらろちあり。今次いまのめの假名なまをまの假名なまよまるとい。マ
ムメモの五音ごおんの通とほひよりおのづといめいままひとまをとりと
なん。さてこのこと。江戸えどのこちろんり。

柿餅の説

正月十一日。具足ぐそくは供そひの餅もちハカかて截きりとい
むあへ。或あるハ槌つちを破やぶ缺けつて用もち也。こを缺餅けつもち
といふより詳つまひあり。今世俗餅ゆせきもちを薄うすく厚あつきたるハ柿餅かきもちの葉は
よ似よたるを以もつて柿餅かきもちと名なづく非ひあり。

女房 奥様の説

或書ある云い人の妻つまを女房にようぢやうといふ
と。古代こ代こ人の妻つまのまのあつと。
品位ひんよき女おんなのこをまごぐ。女房にようぢやうといふたつあり。今由ゆ
ては掃菰せうもの妾めかけを家の女房にようぢやうといふて貴人きじんの妻つまをおく
といふ事こと古ふるへいあり。近世きんせいの稱なづあり京都きんぎよよて町人ちやうじんよて
由ゆ召仕めいしのあつ輩ともぢハ奥おく々々といふあり。

仇新造の説

或書ある云い人の妻つまを仇新造あにんぞうといふ。昔むかし
よりあり。や。蜷川なまがわ殿中てんちゆう日記にちぎよ由ゆこ
ゑたり。よき人ひとハ先妻まづつまをむくるといふ。必妻かなめつまの住居すまひを家いえ
を新あにん造ぞう作る由ゆハ仇新造あにんぞうといふや。考かんがふ。京都きんぎよ
てハ親おやの妻つまを奥おく々々と稱なづす。子この妻つまを仇新造あにんぞうと稱なづす。

江戸の如く年老婆と至まで稱はるるところ。唯部
住の妻の事を。新造といふあり。

儒衣の説

能譜歳時記云。あき名たつことよし。昔
筑前守ありける人のむを先。継母の諍言
よめりそのは。先。蟹の儒衣をかり。娘が朝寝をたり
し。めとよ。並てその衣を娘がぬせめるよ。いせり
ハ。父をうたて。娘を害しぬ。その後々の女。父が。後よ。見
く。歌をよめる。

ぬきをうつるそのたをかりの儒衣。せき。後のま。せり
とよ。じよ。ことよ。のち。あき名たつことを儒衣といふ
よ。猶又考くた。

梅檀在林餘木皆香

朱又。す。ト。コ。色。ハ。あ。ろ。く。き。
如く。梅檀の木。林。よ。あ。は。は。ま。

梅檀の匂。ひ。うつ。つ。よ。あ。ひ。あ。き。木。も。白。ひ。あ。る。如。く。こ。の。あ。り。せ。ん
た。ん。と。い。ふ。木。ハ。至。て。白。ひ。よ。き。木。あ。り。梅。檀。二。葉。よ。り。う。ん。を。し。き。ま
と。り。つ。く。け。先。て。二。葉。ひ。く。く。と。を。や。白。ひ。あ。る。あ。り。こ。の。語
さ。の。木。を。う。り。の。こ。を。い。ふ。は。あ。ら。ま。よ。き。人。一。人。悪。き。人。の。あ。ら。ま。を
ら。も。遠。よ。皆。よ。き。人。の。こ。く。見。ゆ。あ。り。是。皆。人。の。餘。功。外。の。人
あ。り。つ。る。あ。り。

三人行必得吾師

論語三人行とハ。我一人他人二人。二人の
内。人。よ。け。し。ハ。を。そ。と。を。師。と。

一人悪くはば。そのことを戒とせよ。二人ともよき者あるとも。思はてても。又うぐの如く。吾心よひきくふるて。よきにへまたがひ。わしきとりのめらたむる時。則師とあるあり。

抱石沈淵

佛名經出んとを求て。ややかききとりの。韓詩外傳二程全書よりの石を抱て何よあつむと

足たり。

老再爲兒

漢文帝紀七八十の翁媪戲して小供の如くと足たり。和倍の常談あるなり。

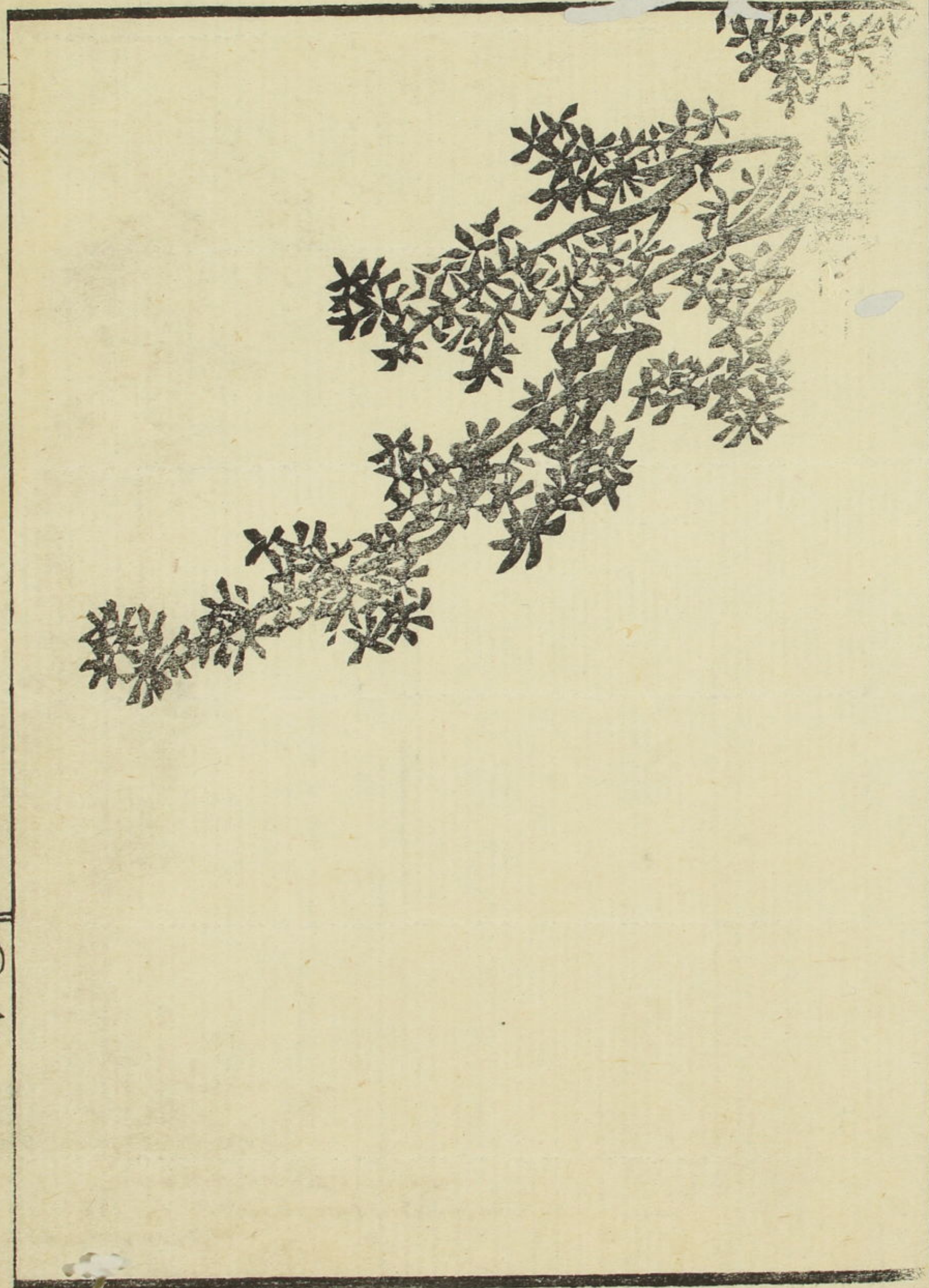
無學行政如無燈夜行

政を行の者あり。この者才あるとも。學問なりといの闇の夜

よとゆ〜火みく〜て道を行くか如〜とあり。あるはともわめつ事たる道ある故。わめむといへとも前後左右とこのとき。自由のちたろきいあかきるあり。又學問あるといへども。才なき人の政をせよ。盲者の登わめむか如くあり。さくたるまにわめむといへども。わきかよ。時三位の善悪とも。さうらぶき振まく。万事は不自由あり。さうらぶき夜るわめむと。さうら〜て盲者のわめむといへてわめむ。まじり

蜉蝣一期

蜉蝣といがさうらふあり。糞土の中。朝生と暮し死と。一説より。その生死三日よきと。甚しくきを以て。朝暮といひよす。徒然草云。命めるものとする



めやまちと重なるもの。是と文るといふ。めやまちて改めたること。必罪科とあるあり。

良藥苦口忠言逆於耳

說苑能有菜の苦とめて。口は苦し。熊膽などして

あるるし。臣として君よきことをい。諫言なとすといひ必忍。おの耳よさうふあり。さるよよつて。昔唐土よも比干の忠言殷の紂王の耳よさうふい。比干は比干をさうもて殺さるとある。そのため唐土のよめ。奉朝既は例あり。今も累る。

對牛彈琴

廣弘明集野客叢書牛琴をさうするよめ。めをさくありさとい。耳よめをぬといふ

あり。

如散蚰子

俗言あり。もの殺多くちるることといふ。

無約請和者謀也

孫子敵味方久しく戦たまし。もとよめ。わらうを請ふ。だり

ある人を質よとる。或は以夾達ま。さよとの證據の約束も。なく。た。私睡せんとさる。欺き偽つて。謀畧のよなてありとま

君子務本本立而道生

論語君子本をつとむとい。力を根本よもちるあり。

故よその本を立て後道生あり。譬るに藝よても。藝の根本よ。でそまんと。かをつく。そむ心あり。後その根本よいたる也。

その根本まで至らんとするより常こそけむとおとなつてり。むこちのりうらるるをー

逐鹿獵師不見山

その意を好て後と忘るるなり。

莊子 義上は同じ。

得兔忘蹄

義上は同じ。

得魚忘筌

治大國如烹小鮮

老子經のまじりきひーくきて。國をさまり給ふとあり。小鮮といふ魚を煮るに喩ひらうと表はければ魚碎て粥の如く

老子經のまじりきひーくきて。國をさまり給ふとあり。小鮮といふ魚を煮るに喩ひらうと表はければ魚碎て粥の如く

成ありとや。是國を治るを治むるといふ義はあたるなり。武士訓に人を治るはあまのりもけや多くきひーけと。うりべりまたうやうあまとも。そむさうらむのらうあり。老子小鮮を烹がと一といひの語のようは通するなりとのせたり。先家内のものよ朝起などさせんとあゆり。已さき朝起。家内の者よ。早起ありともさせたり。已祢がたり。家内の者よ。亦祢が。或は外はなまありとも。家内の者よ。させんとあゆらば。已まて。後家内の者よさせたり。已あまらぬこと。家内の者よ。あまらぬとあるなり。已んせうして。きひーく。家内のものを煮りつらむ。づひは小魚の如く。烹碎るあり。謹を。昔慈鎮和尚の哥よ。身をつとて人の心とあうとたり。命はあしき者とあうづや



長居有懼

世俗の常談あり。史記云范蠡を由らく。大名の下よりひさしく以て居難しとあり。是呉國を亡し。其功既成りしむ。范蠡身をひくちる。范蠡のこと猶會稽の語のところが。凡合考くあり。

吹毛索瑕

韓非子よく世俗のいふ語あり。猶とて同じ意。前漢書よも出たり。

人無遠慮必有近憂

論語孔子の語あり。ものち百里千里の外をも慮らざれば。必ずしもさなく。この上よも憂出來るありと。

盲者失杖

陳同甫集盲者杖なくして。惘然たることありあり。譬人白昼は道をゆりき。さくよ

くらし三は入り一如くちる。

不孝有三無後為大

孟子不孝は三つの品のあり。一は親のいかにあまをたぐひく。二は子孫断絶するをないこと。三は子なくして。先祖の系りごとをたつあり。此三つ皆ふ孝あり。練つ。不義はもと一つ。二つより家はぐ。一は父母年よととも。その子俸禄の為。二つは父母をや。一はなり。三つは妻を先とく。

紅波流盾

大平御覽抱朴子黃帝涿鹿野よおいて。殺ひたるとき。血流漂て杵をなぐをとあり。此

隨器說法

傳燈錄 如來法とときあふよ。先其器そのありの。ゆのとよよりて競あふあり。

狐假虎威

戰國策 史記 勢よりつと威とそゆるとらふ。縦人至て心涉しとらふとも。金銀をたくはくもたば。他人是あが先。教多才智あるやうよはふ者あり。是大なるたがひあり。其才智あるやうよもるひ。金銀のあつとすして心よ才智あるよめらざるあり。今虎のとく狐化るとらふとも。狐ハ狐あり。能考し知るぞし。

良馬策

尉繚子 譬才知ある人學問をまなせる是にふるよ。策をめてとくあるぞし。是ふるのよめらざるよらよよ。此の意りよらあり。

虎嘯風生

古樂府 周易 龍興て雲浮とら

塵積成山

說苑 塵とらふとも積らる。遂に山ともあるとらふ。とんや。學問そのおの藝よても其功積らるめら目出度名人ともあるるよ。必あたらるとなるよ。

以血洗血

唐書源林傳 汚穢の甚しきとらふ

矜者不長

老子經 天道盈を缺の語と見合とらふ

以湯止沸

薪を抱て火を救とらふ。愈甚とらて。あふよとらとらふ。譬盜人よ盜人を返りしるよ。

命緣義輕

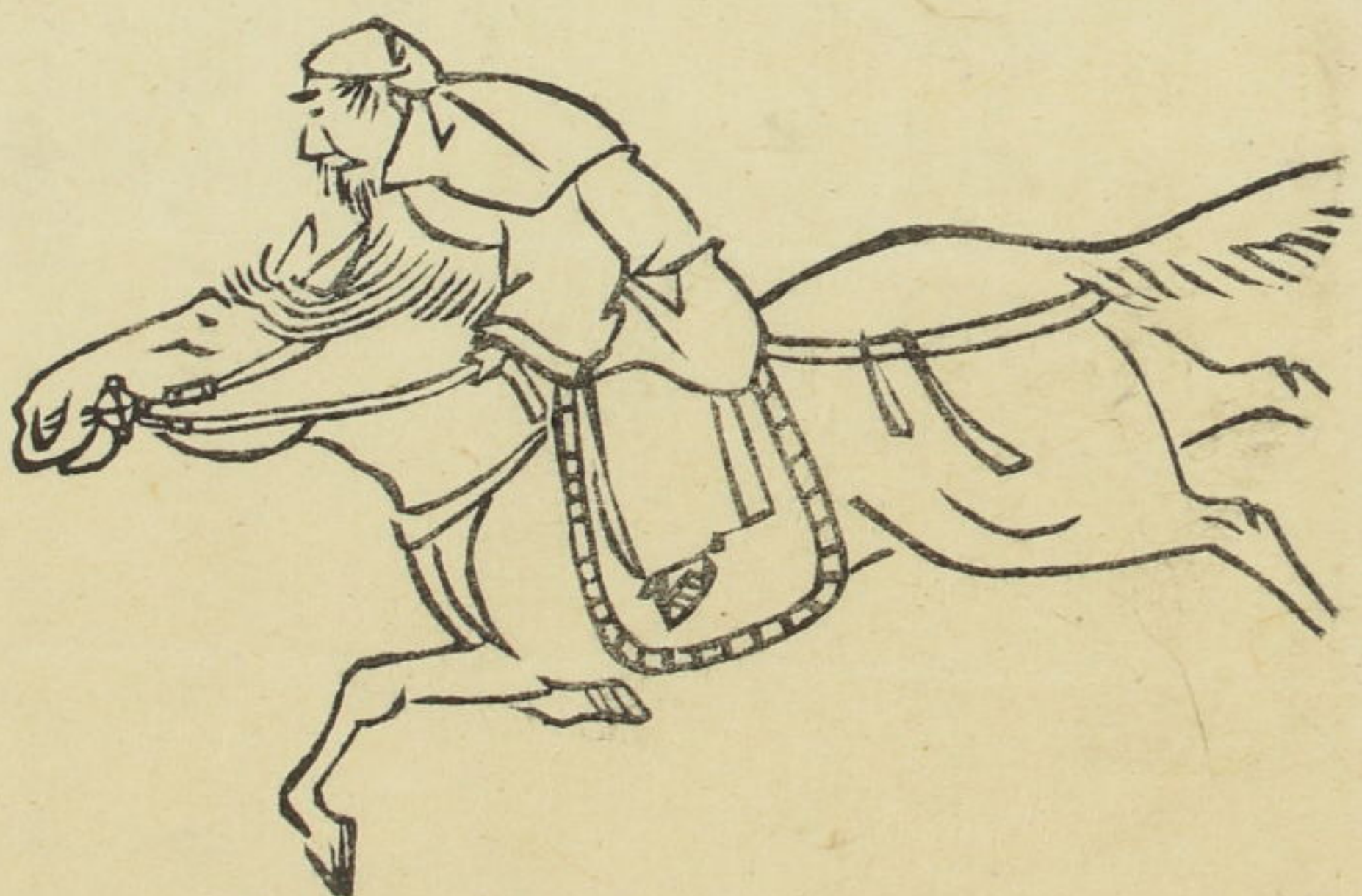
後漢朱穆傳并澤子之武士訓いふたといふ
 人ありて命を千貫萬貫より入らんとすといふ
 由のゆるるるごとくごとく大切なる命あるごとく義よりして極こと
 塵よりゆるるるごとく義りと重きもの世よめるをうらむ
 源致雄哥よ

命をたぐらざるも一てものぬの道よりおもさ道めらるる
 とのり是よくとの語よがたなり

盛者必衰

仁王經偈盛ある由のり亦衰とあるなり
 涅槃經よ盛者の必衰とありとすなり
 戦國策史記琅琊代醉蛇よ足なり。妄の是
 と添るるごとく是を用の謂なり

畫蛇添足



以餌取魚

六韜 魚ハ餌をくらつて人ハひりて。人ハ録を食て君
よ腹をちり。

信言不美 美言不信

忠言耳よ逆うと同一意なり

犬有守夜之警 雞有司晨之益

是皆禽獸
といふ也。

その守とあるをちんそ人として守とのあるものちんちんちりなり
なをかとするなり。

大行不顧細謹

史記 是ハおびたき。大あることばす。
よハ必ある實を守り。約束する事。

違へくも苦るるなり。小あることよりりてハ大事。

しとあともひがたしとあり。

為玉碎勿為瓦全

世俗名をとるより。徳をとると
其身義は依て死をなき也。

徳をとるところ玉の如き身を瓦の如くなつて命をまうとせらる
ものあり。是よりしとあり。先徳の文字のとりて。世俗の心は
ひよ相違ゆるちり。徳の文字と義の文字とひきりて常と心
し。さしハ名をとるより。義をとるとあるなり。能く心は玉の如
瓦とちりなり。

刀瘡易没 惡語難消

是刀瘡ハいん安くして。おと
よあふせとあり。惡語ハ一言

たりとも。いん出まことなり。その身死せよなきがくし。

人事盡處便是命也

天道のあつてもよむ。およむ。人事とま。はくして。後天よまる。古語人事盡處と命と。あるを考へる。と。か。ん。た。り。

工於論人者察已常踈

世俗能人の非をた。世よ人あき。ご。く。ひ。の。し。

或ハ政事などつ。もの。議。あ。り。う。し。が。ど。ま。り。て。い。は。い。を。行。ふ。い。と。う。な。り。な。ど。ひ。り。く。ま。り。を。者。あ。り。く。る。倍。の。己。が。非。の。多。き。と。山。より。さ。く。め。る。を。あ。り。を。人。の。非。の。多。く。を。く。り。也。が。不。實。ある。もの。人。の。非。を。こ。る。心。内。よ。ま。く。て。お。よ。む。人。の。非。の。と。あ。り。て。己。が。非。を。あ。り。と。唯。己。と。あ。り。よ。し。の。ま。り。や。う。い。と。ま。り。な。け。う。し。か。ん。と。や。

罪疑惟輕功疑惟重

尚書罪の疑ハ。譬殺を。流罪を。

と論ざる。罪。あ。り。を。輕。さ。よ。ま。た。う。つ。て。流。さ。る。と。あ。り。と。と。罪。あ。り。を。殺。ゆ。の。と。と。ま。り。ハ。生。さ。る。と。あ。り。と。よく窮謀て刑を行。又功の疑と。人。を。賞。せ。よ。衣服を與へ。金銀を與へ。と。思。ふ。よ。金。銀。を。め。ら。る。と。金。銀。より。重。く。せ。ん。あ。り。知。行。な。ど。と。い。ふ。義。あり。淮南子塞と。城郭の外を塞と。則塞て。此。外。は。住。居。る。人。故。塞翁といふ。翁といふ。の。稱。號。あり。こ。て。此。翁。の。

人間万事塞翁馬

塞翁といふ。翁といふ。の。稱。號。あり。こ。て。此。翁。の。

家富さうへ。又男子あり。或母との男子中園をより。名は一匹
を多たり。依て一親類ともうちあり。能きるをゆめふと。さ
を母えて翁より。翁の曰。民の身として。ふるまよふと。なま
まことめま。う。さ。と。い。か。後。う。の。ふ。は。男。子。な。て。せ。う。く。落
て。大。き。い。腰。の。骨。を。折。く。立。と。を。あ。づ。又。親。類。と。も。そ。の。こ。の
骨。を。折。た。る。と。を。な。け。さ。て。翁。は。告。翁。又。答。て。曰。今。悴。腰。の。骨
を。折。た。り。と。い。く。と。も。さ。よ。う。て。さ。い。ひ。ひ。を。う。く。る。と。も。や。あ。る
し。翁。は。そ。う。な。ま。心。と。よ。め。ゆ。め。さ。と。言。ふ。さ。て。亦。翁。の。内。は。毛
色。常。に。ち。う。ひ。一。牛。生。た。り。親。類。又。う。ち。より。心。は。阿。と。ホ。ん
め。る。下。も。や。く。る。牛。の。生。一。と。翁。は。告。又。塞。翁。の。答。ふ。よ。
や。一。と。歎。の。出。た。る。と。さ。い。ひ。つ。と。吾。が。内。の。凶。事。あ。る。と。さ。い。さ

し。といふ。またして。後塞翁の眼は。か。と。たり。親類。是。を。う。め。一。と。
翁。は。告。く。さ。さ。と。翁。是。を。う。め。一。ま。づ。眼。つ。が。と。て。ゆ。め。と。は。は
さ。り。う。よ。き。幸。ひ。ゆ。め。あ。る。ま。し。と。い。ゆ。め。さ。か。な。一。む。と。も。あ。る。と。
といふ。今翁の言葉の如く。幸いとち。う。一。と。め。つ。その。日。け。の。お
節。諸。國。と。さ。い。合。戦。の。世。と。あ。る。と。さ。い。ひ。さ。ら。よ。う。く。諸。國。の。人。歩。と。い
て。出。く。戦。役。よ。を。使。ひ。と。る。塞。翁。住。居。せ。一。と。さ。う。よ。り。ゆ。め。と。い
軍。役。よ。人。歩。出。親。を。う。し。あ。ひ。子。殺。一。日。こ。な。け。く。ゆ。め。さ。い。と。い
と。も。塞。翁。親。子。へ。つ。た。と。い。ゆ。め。ゆ。軍。役。よ。出。さ。一。と。う。つ。て。身
を。い。た。と。い。ゆ。て。杖。持。を。と。り。ひ。月。日。を。送。り。け。り。と。さ。て。戦。由。和。睦。と
ありて。治。里。け。り。

紀原故事大全 下大尾

岡田有信先生著

萬物紀原

故事大全

二冊

右十編迄追々出来仕

文政十三年庚寅正月吉且

江戸書林

富田屋榮藏

角丸屋甚郎



十

明治二年
己酉十月十日
來

